成事ゑるし將多に、湯の流ければ、里の名を湯河原と唱ひしが、又海面もそゞろに熱かりければ、後改て熱海といふめる、東鑑に云、建暦三年十二月、修理亮泰時、伊豆國阿多美郷の地頭職と云云見ゆれば、名に流れしもいとはるけく、なんおぼゆる、慶長二年三月、恐くも大神君御臨湯ましましぬ、其後寛永三年の頃、大猷君被爲成御催して有て、假御殿建しが、故有てや止ぬ、其御殿跡として、今猶遺れり、

〔熱海温泉圖彙〕熱海七湯（大湯の外、時を期してわくものなし、湯の味もおのゝ異なり、）

野中の湯、上の町より一町餘北のかた山の麓にあり、そのほとりの土丹のごとし、里人此土をもつて壁をぬる、又砂中に礫ありて金色あり、此湯わく事淺し、ゆゑに湯升をもうけず、清左衛門湯、下の町の北にあり、里說に云、むかし馬走清左衛門と云もの、馬をはせて此湯壺に墮て死せり、今において湯壺にむかひ、清左衛門ぬるしと叫ば、聲にゑたがつて沸いづる、大に叫ば大にわき、小しくよべば小にわくといふ、唐土壽州の咄泉の類なるべし、平左衛門湯、法齋湯ともいふ、上町の北にあり、人その名を呼ば聲に應じて沸事、清左衛門湯に同じ、唐土茅山の泉、手を打ばわき、又岳陽の泉、人の聲を聞て沸き、西寧の泉、人の足音に應じてわくの類、和漢同日の談なると、前にもものしり人いへりと、里人がものがたりぬ、水湯、本町の北、坂町のほとりにあり、此湯にかぎりて鹹氣なく、水を沸したるごとくなるゆゑに水湯といふ、水湯の源より南の方五尺ばかりへだてたる所に湯の湧所あり、此湯は鹹氣あり、地中の泉脈はかりゑるべからず、風呂の湯、水湯の西在家の高砂や大介庭中にあり、そのかたはら三尺ほど東の方の石の間より、細流の湯を湧いだす、此湯鹽氣さらになし、ゑほけあるゆと、ゑほけなき湯と相隣る事僅に三尺をさらず、もろこし江乘縣の泉、其績塘の湖水半は冷に半は熱しといふも、此湯に比すれば奇とするにたらず、左次郎の湯、醫王寺の門前にあり、左次郎と云もの、庭中にあるゆゑに名づく、河原の湯、下町の